漢詩を味わう

第83回

呉楚（ごそ）　東南に坼（さ）け

乾坤（けんこん）　日夜に浮ぶ

登岳陽楼（がくようろうにのぼる）

杜甫

昔聞洞庭水
今上岳陽楼
呉楚東南坼
乾坤日夜浮
親朋無一字
老病有孤舟
戎馬關山北
憑軒涕泗流

昔聞く　洞庭の水
今上る　岳陽楼
呉楚　東南に坼け
乾坤　日夜に浮ぶ
親朋　一字無く
老病　孤舟有り
戎馬　關山の北
軒に憑れば涕泗流る

洞庭湖の壮大さについては昔から聞いていたが
今私は岳陽楼に登ってその湖面を眺めている。
呉と楚の地は、この湖によって東と南に引き裂かれており
その湖面には天地宇宙すべてのものが昼夜の別なく影を落として浮動している。
思えば親しい人々からも一字の便りすらなく
この老いて病む身に、ただ一艘の舟があるだけだ。
今なお戦乱が関所や山を隔てた北の故郷では続いている。
楼上の手すりに寄りかかっていると、涙が流れ落ちるばかりである。

《岳陽楼》湖南省岳陽市の郊外、洞庭湖に面して建てられた楼。もとは後漢時代に軍事上の目的で造った物見台だったといわれる。
《洞　庭》中国でかつては一番大きい湖（現在は鄱陽湖）で、単に湖というと洞庭湖を指した。
《呉　楚》春秋時代の国名。呉は現在の江蘇省南部、楚は湖北省から湖南省あたりを指す。
《東南坼》呉と楚の地が、洞庭湖によって中国の東と南に裂かれている、という意。
《乾　坤》天と地。
《無一字》一字の便りも無い。
《戎　馬》戦に使う馬のことで戦争を意味する。
《関　山》関所のある山。
《憑　軒》手すりにもたれる。

大暦三年（七六八）の春、杜甫は五十七歳で夔州（四川省奉節県）を去り、長江を下る最後の放浪の旅に出ました。同年の冬、昔から噂に聞いていた雄大な洞庭湖の湖畔に建つ岳陽楼に登りこの詩を詠みます。五言律詩の形式です。

首聯（前半の二句）は岳陽楼上からの洞庭湖の眺めを述べます。頷聯（第三・四句）は思い切った表現でその感動を詠います。「呉楚東南に坼け」は洞庭湖が国の中心で湖を境に東と西に分けられるというイメージです。「乾坤日夜に浮ぶ」は、洞庭湖の水面に太陽と月が昼と夜に代わる代わる浮かんで、時が流れていくといった感覚です。この二句は古くから洞庭湖を称える有名な句となっています。

後半はこの大きな自然のなかで、独り楼上にたたずむ自分に目を向け、親しい人からの便りもないような我が身の不遇と、さらには未だ戦火にある国の不幸まで言い及びます。杜甫はしばしば壮大な自然と社会のありさまを対置して、人間の不幸やはかなさといったものを詠っています。杜甫には厭戦、反戦の詩が非常に多く、その詩は後世にわたって人々に膾炙され、社会批判、政治評論として機能していました。そこが杜甫の大詩人たるゆえんです。

この詩を詠ったころの杜甫は晩年を迎えていましたが、非常に貧窮していて戦火のために長安にも帰れずにいました。この詩を詠んだ二年後の冬、杜甫は故郷を夢見ながら、「老病孤舟有り」とこの詩で詠じた舟中で没しました。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・偉大なる憂鬱杜甫（平凡社）・漢詩の事典（大修館書店）

連夜深山の雨　春光応（まさ）に未だ多からず　暁（あかつき）に看る洲上（す）の草　緑は到る洞庭の波

《大意》毎晩、奥深い山に雨が降り、春の訪れは遅いようである。しかし、明け方の洞庭湖を眺めると、中洲の草も波の色も早や緑色をたたえている。
（惲寿平詩・暁起）

貧は悟る道中の楽しみ　酔うて偸（たのし）む　忙裏の閑

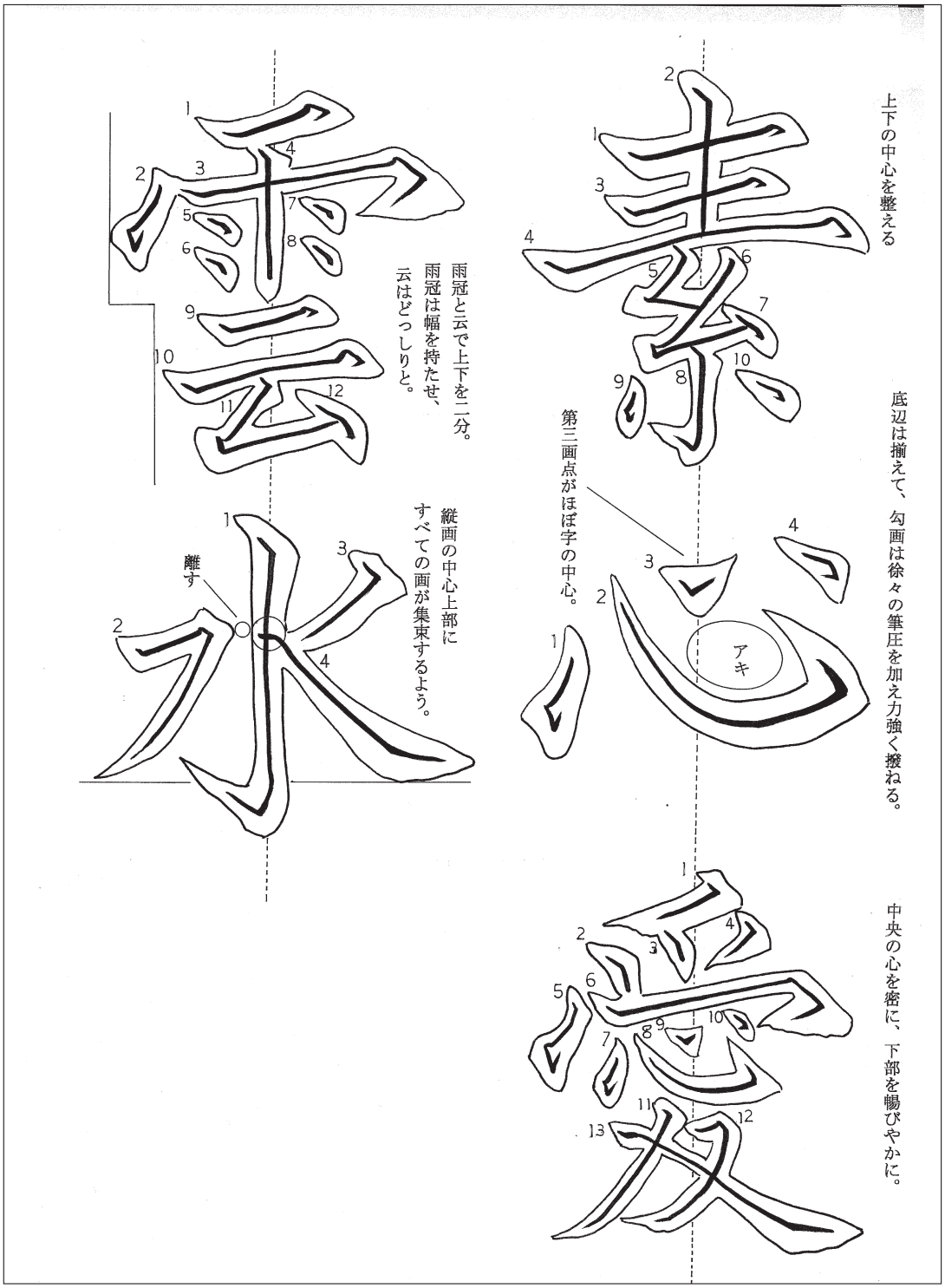
《大意》貧しくとも道の楽しさを知り、酔うては忙しい中にも閑暇を見出す。
（羅與之）

身安きを楽しみし為し　憂い無きを福と為す

《大意》身が安らかなるを楽しみとし、心配事がないのを幸福とする。
（秦子敕）

読み　素心雲水を愛す（本来の心は自然が好きである・范仲淹）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隷　書

坦腹すれば江亭暖かなり

ペン字部課題　（４月30日〆切）

細字部課題　（４月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

音　チカヒッカイ
トクノウバクボウ

略解　過失は必ず改め
道を悟ったら忘れることなかれ

佐藤象雲書

支部

順位

氏名

咲きみちて
庭盛り上がる桜草

山口　青邨

和泉溪石先生書

能無疑惑

能く疑い惑う（者）無からんや

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書(29)

象雲臨

『能無疑惑』

今月の四文字は偏旁のバランスや上下の組み立てが絶妙です。左右妥当法や上下安置法と言われる結構法の基本を学びます。

「能」偏と旁はほぼ互角の力関係です。偏は上部のムの幅を持たせ、旁は下部の終画を重厚にしてバランスを保っています。

「無」しなやかで軽快な線で纏めています。第三横画はゆったりと暢びやかに。烈火は行書的に連綿線で処理しています。

「疑」偏は各線の打ち込みを強くして横画右上がりです。旁は偏に寄り添うように。最後の波磔の起筆位置に留意します。

「惑」第一画横画は稍上方に反りかえり結体を引き締める役割です。各線があるべきところに寸分の隙もなく収められていて、非常に安定した結体です。戈法は湾曲し過ぎないように注意し、収筆に向かっては筆圧を徐々に加えていきますが、撥ねは短くして余韻を残します。

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書 (11)

文質彬彬として、然して後に（君子。）……

象雲臨

『文質彬々然後』

以前にも述べたように、書譜は王羲之を典型とする書芸術論や、書を学ぶ上での心得から、細かな技法解説などを書いた、いわゆる書論です。

今月の「文質彬彬として、然して後に君子。」は「華やかさと質朴さとが調和して、はじめて有徳の君子。」という意味で、論語から引用した部分です。孫過庭はここで、「質とか妍とかの様式は時とともに人の好みに従って変化するもので、古法に則っていても、妍美な感覚を盛り、また当世風であって、時流の弊害に流されないことが大切である。」と述べています。全く現代にも通用する、書作上の要諦だと思います。

私たち伝統書を勉強する立場においては、古典に寄り添いながら現代的な感覚を盛り込むということ自体が容易いことではありませんが、また同時に時流の弊害というものは何なのか考えながら書作することはまた大切なことです。